

うちまき うめだ ちめい  
内牧・梅田の地名

内牧地域は縄文時代から弥生時代、古墳時代にはすでに人びとが居住していた跡がみられる。

地域内に存在する古墳群は、いままで七、八世紀のものと推定されていたが、昭和五十二年の学術調査で五世紀ごろのものであることが判明した。古代の御名代部みなしろべ（春日部）と深い関連のある地域と推定される。

中世になって荘園時代は太田荘百間領となり、後期には岩槻城主（渋江氏）の領地となった。近世になると正徳元年（一七一一年）幕府直轄の天領となった。

近代（明治時代）になって浦和県・大宮県を経て、明治四年埼玉県に属し、明治二十二年町村制施行により内牧村と梅田村が合併し、南埼玉郡内牧村となった。昭和十九年四月粕壁町と合併して春日部町となり、大字内牧・梅田となった。

この地域の地名について、埼玉県地名誌（民俗学者にちじゆかちめいせきしゆ 荻塚一三郎著）によるとつぎのように解説している。

〔内牧村〕 「マキ」には牧場・同族集団・小平坦地等いろいろの意味がある。今ここの地形をみるに概して水田地帯にあるので必ずしも牧場としては恰好の地ではなかったのではなからうか。そこで内牧は同族集団の意と解するのが適切であろうと考える。その一つの理由は「マキ」に「ウチ」と冠している。「ウチ」の語は同族に冠するにふさわしいものと考えられる。第二の理由は同族のことを「イチマキ」（ウチマキの転）という地方もあるからである。

⑨ 太古の民俗は血族または同族によって集団生活をしてきた。

〔梅田村〕 梅田の「ウメ」とは梅の意ではなくて埋めるという意味である。梅田は埋田である。この地は古隅田川や古利根川の沿岸の低湿地である。「ドブ」・溝・沼などを埋立て田としたために生じた名とみる、とある。

しかし「春日部市史」の編さんをする作業のなかで多少これらの解明に疑義もうかんでくる。筆者はつぎのように考えている。

〔内牧村〕 「マキ」とは牧（ウマキ）ではなく「任」（マキ）である。「マケ」の転じたもの（大言海より）で、万葉集の中に「末伎」という万葉仮名がある。また、「ウチ」とは我、またはオノレという意である（大言海より）。このような事項から考えて、御名代部春日部に関連のあるこの地を統治した朝廷の臣がいたことから想定して、オノレに任された地の意と解して「内牧」（内任の転）とみる。

〔梅田村〕 古老の語り伝えと地形から推測すると、千六年前の天延元年（九七四年）の梅若丸伝説による隅田川に投げ込まれた場所はこの付近で、袋村にて救いあげられたらしいとの話があり、いまでもその場所に梅若山王権現として山王社が祀られている。当時は隅田川、利根川はこの地方の低地を濫流らんりゅうしていた時代であり、その後河川の流路が変わって干拓され開かれた場所であり水田地帯となったという。地名は梅若伝説の「梅」をとり、梅田となったと解する。

初出 「広報かすかべ 昭和五十四年二月」かすかべの歴史余話